

# 個別カウンセリングによる自律的学習者育成の試み

—— 英語授業実践報告（3） ——

—— 研究ノート ——

## Individualized Counseling to Develop Learners' Autonomy

—— Practical Report (3) ——

水 本 有 紀

**キーワード：**自律的学習、自律的学習者、学習カウンセリング、学習ストラテジー、  
メタ認知能力、TOEIC、モデリング、内発的モチベーション

### 要 旨

神戸山手短期大学の TOEIC 初級・中級クラスでは、学生の自律的学習を支援する試みとして、H22年度に担任による学習カウンセリングを導入した。H23年度はH22年度の実践を省み、カウンセリング時間の充実を中心に、いくつかの点で改善を行った。3年目の本実践報告では過去2年間の研究結果を踏まえ、新たに試みた取り組みを実例を交えて紹介する。今回は社会的学習と同義に用いられることの多いモデリングを取り入れ、モデリングによる学習者の学習成果、学習に対する姿勢の変化を考察した。クラス全体の TOEIC 模擬テストスコアの上昇からは、モデリングが学習成果により影響を与えたと考えられる。また、モデリングに関するアンケートでは、ほとんどの学習者にモデリングによる内発的モチベーションの向上が見られた。

### I. はじめに

前回の実践報告では、真に自律した学習者を育成するための学習者の意識改革への働きかけに関しては改善したもの、学習者の学習成果自体に顕著な変化は見られなかった。前回の SILL のメタ認知能力アンケートの結果から、自分の状況を客観的に分析できるメタ認知能力が具わっていても、学習に対するやる気は、結局は個人のモチベーションによるものだという結論が出された。本来、自律的学習者育成における教員の役割は「ファシリテーター」や「情報提供者」であり、授業内に行う個別カウンセリングの目標は学生の内発的モチベーション (intrinsic motivation) を高めることにある。今回は、この内発的モチベーションを高めるために有効であると考えられるモデリング (modeling) と学習者の内発的モチベーションとの関連性を主な調査目標とした。モデリングは心理学研究の分野で社会的学習と同義語とし

て使われることが多い。1960年代以降、Albert Bandura（1971）による「社会的学習理論」の定義づけから、モデリングは、他者の行動を模倣することで学習者が自分の行動を修正、確立していくことと定義されるようになった。モデリングの過程において、学習者が直接強化されなくても、他学習者の行動を観察・学習することで、学習者自身の強化も可能となる。モデリングの方法として、具体的には、前回の研究報告で提案した「自分の学習計画、結果を他の学生の前で報告させたり」、「学習成功者に体験談を報告させたりすること」（村上、水本、2011）が挙げられる。自分の学習の計画、成果を他の学習者の前で報告させることで、学習者相互の内発的モチベーションの向上を図った。

## Ⅱ．調査方法

### 1．対象、回数

調査の被験者は、H24年度「TOEIC 初級」クラス17名、「TOEIC 中級」クラス8名、このうち2名は両クラスを受講している。前期（15回）のうち、個別カウンセリングを月に1回、合計4回実施した。また、今回の調査目標であるモデリングの一環として、学生それぞれが自分の学習計画、学習成果、反省点などを発表する機会を設けた。授業初回と授業最終回に学習ストラテジーアンケートを、授業最終回にはモデリングに関する項目を新たに加えた授業アンケートも行い、カウンセリングへの考え、自宅での学習時間の変化についても調査した。また、前年度に引き続き、テキスト付属のオンライン学習教材の TOEIC 模擬テストを用い、英語学習の成果を評価した。なお、授業アンケート、学習ストラテジーアンケート、カウンセリングシート、学習計画表は前年度（村上、水本、2011）と同じ形式のものを使用した。

### 2．個別カウンセリングとモデリング

1回90分の授業内に8～17名の学生に学習計画表とカウンセリングシートを用いたカウンセリングを行った。カウンセリング時間はクラスの規模によって異なったが、5～10分を割り当てた。さらに、各学生に「計画通りに学習できたかどうか」「計画通りに学習できなかった理由」に加え、モデリング活動として「有効だと思われる学習方法」について、なるべく客観的に「検証（ふりかえり）」を行いながら発表する機会を与えた。「検証（ふりかえり）」は通常は個別カウンセリング概念の一要素であるが（村上、水本、2010）、クラスメイトの前で行うことで、より客観性を意識した検証（ふりかえり）になったと筆者は考える。さらに、モデリングの手法のひとつである学習成功者の体験談として、TOEIC 模擬テストでクラス内トップの500点以上を取った学生Aに、本人の了解を得たうえで、どのような学習を経て高得点を獲得できたかを他の学生の前で発表してもらった。

### Ⅲ．結果と考察

#### 1. モデリングによる内発的モチベーションへの影響

##### 1. 1 授業アンケート

前期授業最終回に「授業アンケート」を行い、個別カウンセリングへの感想も含め、学生に自分の学習過程を客観的に分析してもらった。同時に、新たにアンケートに加えた「クラスメイトの学習状況の発表を聞いて、自分の心境に変化はありましたか？また、発表に対してどのように感じましたか？」という項目において、モデリングへの学生の反応を確かめた。

#### 初級クラス

- 500点以上取っていた子がいて、自分もそのくらいの点数を取りたいと思った。
- ちゃんと計画を立ててやっている人もいて、すごいと思った。その分テストで良い結果が出ているんだなと思った。
- クラスメイトの発表を聞いて、こんな学習方法があるんだなと思いました。
- みんな頑張ってるので私も頑張らないといけないなと思った。
- TOEIC で500点以上取った人がいると聞いて、自分も頑張らないといけないと思った。
- やっている人はやはり伸びているし、自分も頑張ろうと思った。
- 私はみんなより点数が高くないのでがんばらないとなーと思いました。
- みんないそがしいのに頑張っていて、私も負けないように頑張ろうと思った。
- NHK の英会話の番組を見たり、洋楽の詞を見ながら聞いて理解しようと思います。
- 変化はありません。でも学生Aがすごいなと思いました。
- 自分も負けていられない、と思うようになった。
- 色々な人の勉強の仕方などが知れてよかった。

#### 中級クラス

- それぞれ工夫された勉強法を聞くことができて、私も真似させてもらおうと思ったことがいくつかあった（NHK、映画）。
- 一人一人違った勉強のしかただと思ったことと、私が気づかず、していなかった勉強方法などを知って実践してみようと思った。
- みんな頑張って勉強していると思って、自分も頑張らないといけないと思いました。
- 皆、勉強していて「すごい」と思いましたし、500点ある人もいて、頑張っていると感じました。私も自宅で英語のニュースを見た方が良いのかなと思いましたし、習慣づける事が大切だと分かりました。
- TV やサイトなど無料で役に立つ勉強法は沢山あるんだなあと考えたので、チェックして活用していきたい。人の意見を聞くことでもっとやろう！という気持ちにつながった。

- 自分はもっともっと頑張らなきゃいけないなあと思った。

全体的に、色々な学習方法を発見したことに加え、「自分も頑張らないといけない」と、ほとんどの学生が良い意味でのライバル意識を感じている。このライバル意識は学習者の内発的モチベーションに関わる要素の一つだと考えられる。

特に、TOEIC 模擬テストで500点以上を獲得した学生Aの体験談に関するコメントに注目したい。学生AはNHKの語学番組を欠かさず視聴し、重要表現をノートに書き込んだり、自分で発音したりして、自己学習を続けていた。NHK語学番組での学習に関しては、個別カウンセリングの際に教員から各学生に紹介していたのだが、教員から薦められるのと、同じクラスメイトから提示されるのとでは、明らかに後者の方が学生のモチベーション向上に影響を与えているようだった。Tim Murphy (1998) は、学生と同年齢の仲間に近いお手本の望ましい態度や実践をモデリングのために活用することを示唆している。年齢的にも社会的地位においても差がある教師からのアドバイスよりも、同じクラスで一緒に学んでいるクラスメイトの学習成果が出たという現実味が、他の学生の励みになったことは間違いない。現に、学生Aのアドバイスを聞いた後、オンライン学習時にNHKのホームページを熱心に見ている者もいた。この点が、モデリングの効果だと言える。

## 1. 2 学習ストラテジー

次に、モデリングによる学習ストラテジーの数値の変化について調査した。特に、H22年度からの研究課題である「メタ認知能力」に対して、モデリングの影響はあったのだろうか。

＜表1 メタ認知ストラテジー値の変化（モデリング実施後－実施前）＞

メタ認知ストラテジー各項目	初級クラス	中級クラス
自分はなぜ英語を身につけようとしているのかしっかり考えている。	－0.19	－0.57
英語を身につけるということは、どんな力を身につけることなのか、明確な目標を持っている。	0.00	－0.71
英語学習をいつ、どのように行うか大まかな計画を立てている。	－0.01	－0.29
インプットに触れる機会、対話をする機会、アウトプットする機会を積極的に作っている。	0.71	0.14
自分の英語力がどの程度なのか、英語試験を受けて確認している。	－0.10	－0.57

メタ認知の数値変化に関しては、特に期待したような変化は見られなかった。しいて挙げるならば、「インプットに触れる機会、対話をする機会、アウトプットする機会を積極的に作っている」の項目に関しては、両クラスともに若干上昇した。これが、モデリングにおいて、学習成功者（学生A）の学習方法（語学番組で学んだ表現をノートに記し、実際に自分でも発音

する方法)に影響を受けた結果だとしたら興味深い。

さらに、筆者が注目したのは、社会的ストラテジーである。

＜表2 社会的ストラテジー値の変化(モデリング実施後－実施前)＞

社会的ストラテジー各項目	初級クラス	中級クラス
わからないことがあったときには、教師やほかの人に助けてもらう。	-0.05	0.14
スタディ・グループなどを作って、ほかの人と一緒に学習することがある。	0.19	0.29
目標言語を話す人々の生活や文化について理解を深めようとしている。	0.19	-0.57
他者がどのような考えや感情を持ち、日々暮らしているのかを理解しようとしている。	0.01	0.00

Oxford (1990) によれば、学習ストラテジーは言語学習に直接かかわる「直接ストラテジー (Direct Strategies)」と、言語学習を間接的に支える「間接ストラテジー (Indirect Strategies)」に分けることができる。社会的ストラテジーはメタ認知能力と同様、間接ストラテジーに分類され、学習過程において他者に質問し、他者と協力し、あるいは他者へ感情移入するといった、他者との関わり合いに関する学習ストラテジーである。各項目の中で「スタディ・グループなどを作って、ほかの人と一緒に学習することがある」の数値は両クラスともに上昇したものの、数値自体が全体的に低いことから、学生にとって学習者同士協力をする機会があまりないという事実を改めて確認した。モデリングと並行して、協同学習 (Cooperative Learning) を取り入れれば、社会的ストラテジー値が上昇することは明らかである。

## 2. モデリングによる学習成果への影響

### 2. 1 TOEIC 模擬テスト(クラス全体)

今年度も2年前から導入している TOEIC e-learning 教材、u-CAT の模擬テストを初級・中級クラスの英語運用能力を測る目安として利用した。模擬テストは前期で4回行ったが、今回は模擬テストの初回から最終回へのスコア変化ではなく、各学

生の最低点と最高点の差を計算した(表3)。最高点から最低点を引いた差、つまり学習の成果は、初級クラス129、中級クラス113と、両クラスとも100点以上の上昇が見られた。また、初級・中級クラスそれぞれの最低点、最高点を比較すると中級クラスの方が全体的に点数が高いが、学習成果には大差はなく、むしろ初級クラスの方が成果が上がった。これは、初級クラスの方が学力の伸び代が大きいということも原因であろう。

＜表3 H24年度前期クラス別 TOEIC スコア＞

	最低点	最高点	最高点－最低点
初級クラス	176	305	129
中級クラス	254	367	113

\*小数点以下繰り上げ

## 2. 2 TOEIC 模擬テスト（学生事例）

授業アンケートで何人かが指摘している「500点以上取った人」というのは、初級、中級両クラスを受講していた学生Aである。

表4の「学生AのTOEICスコアの変化」では、最初の2か月はあまり変化が見られないが、その後のスコアは525点となり、スコアアップについて語る本人の嬉しそうな顔が印象的だった。学生Aは授業での学習にも真面目に取り組み、小テストでは常に満点を取っていた。

次に、学生Aの頑張りを目の当たりにし、学生Aと同じく、模擬テストスコアが著しく上昇した学生Bについて見てみたい（表5）。

ここで、テスト受験日にばらつきがある理由について触れておかなければならない。学生Aと学生Bが受講しているクラスの曜日の違いが一つの原因である。学生Aは初級・中級クラス両方を受講しており、模擬テストは初級クラスの授業内に受験し、その結果は中級クラスでも併用することになっていた。受験日は原則、決められた日の授業時間内と定めていたが、その日に欠席したり、授業時間内に解答できなかったりした場合、後で自分で受験することになっていた。そのため、各学生の受験日は異なることがあった。

学生Aと同様、学生Bも500点以上を獲得し、特にリーディングは150点もの上昇が見られた。学生Bは計画的に学習することに関して「計画的に進めると、少しずつそれが積み重なって上達していけると思う」と認めた一方で、「でも、それ（計画的学習）をちゃんと実行できるようになるためにはある程度強く意志を持たないと難しいと思う」と、モチベーション維持の難しさを指摘している。さらには、「もっと本気で計画的に勉強していきたい！」と今後への意欲を示し、「熱意が途切れないように、頑張っている人を見習って頑張りたい」という学生Bの言葉にはモデリングによる内発的モチベーションの向上が見て取れる。

## IV. 今後の課題と展望

神戸山手学園の建学の精神に、「自学自習」がある。

本学は、建学の精神として「自学自習」、「情操陶冶」を掲げています。これは、本学園創立の最大の功労者である杉野精造が提唱したものです。杉野は、「学校とは教校ではなく学ぶ所であり、自力的学習の場である」とし、「自学自習」を提唱しました。「学習」とは、

＜表4 学生AのTOEICスコアの変化＞

受験日	合計点	リスニング	リーディング
4/12	350	140	210
5/14	315	215	100
6/11	525	325	200

＜表5 学生BのTOEICスコアの変化＞

受験日	合計点	リスニング	リーディング
5/24	275	220	55
6/14	395	235	160
7/9	515	310	205

いうまでもなく『論語』の冒頭文にある「学びて時にこれを習ふ」を出典に、本学園はこの「学習」を「自学自習」とし、よりいっそう自力的で積極的な、自ら進んで学習する姿勢を鮮明に主張するものです。また、「情操陶冶」は、この「自学自習」の精神を受け、「知」だけの習得に偏らず、「情」と「意」を併せ持つ人格の形成を理想とするものであり、健やかで調和のとれた人格、しなやかで豊かな知性が自ら形成されることを教育理念としています。

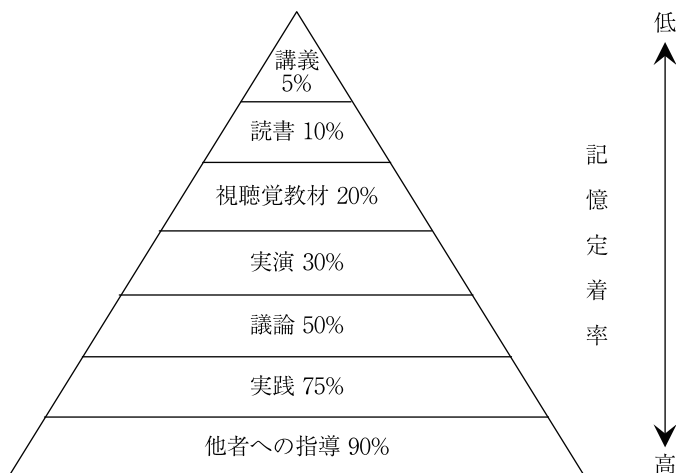
わずか半年間の授業内で、モデリングの効果が学習成果としてはっきりとした形で現れることを期待するのは難しいのかもしれない。しかし、本学の建学の精神である「自学自習」を英語学習という形で身を以て体験できたという点ではモデリングも含めた自律的学習者育成の意義も大きかったのではないと思う。この体験は、今後の学生生活、さらには卒業後の社会生活において、きっと役立つであろう。

授業アンケートと TOEIC 模擬テストの結果を総合すると、モデリングにより、学習者の内発的モチベーションが向上したと考えられる。しかし、モチベーションが維持されることにより、更なる学習成果につながるかどうかは、ある程度長期的視野で見る必要があるだろう。では、モデリングにおいて教師が採るべき立場とはどのようなものか。よい学習成果を上げた学生を褒めることで他の学生のモチベーションはより一層上がるかもしれない。しかしそれは今回目指した内発的モチベーションの向上ではなく、外発的モチベーションが上がったにすぎない。教員から賞賛され、認められるというのは外発的報酬であり、それに動機づけられるのが外発的モチベーションである。今回の調査で目標としたのは、学生の内発的モチベーションの向上であり、外からは与えることのできない達成感や成長感、学習の楽しみ、自己実現を得られることなのである。テストのスコアアップを外発的報酬とみるか、内発的報酬とみるかは意見の分かれるところであるが、よい成績をとるためにスコアアップを目指すのか、あるいは自分の将来のため、自己実現のために目指すのかが、判断の基準であると言える。学習成功者の体験談と頑張りに影響を受けることで、自分も頑張りたいという、自分の内から発せられる「気づき」こそ、内発的モチベーションである。今後は、学習成功者による体験談を英語学習アドバイス集としてまとめたりしながら、モデリングをより効果的に授業に取り入れていきたい。

また、さらに学習成果を上げるために、社会的ストラテジーにも関連する、協同学習を取り入れた授業展開も考えられる。最後に示した図1は、授業の手法と指導内容の定着度の関連を表した学習ピラミッドである。

特に「他者への指導」が90%という高い定着度を示している点は興味深い。自分が理解している学習内容について互いに教え合ったり、ペアやグループで課題に取り組んだりする協同学習の手法を取り入れていけば、学生の社会的ストラテジーとともに学習成果のさらなる向上が

図１ 学習ピラミッド



期待できる。また、今までは学生がアンケート回答時にしか意識しなかった学習ストラテジーに関して、各ストラテジーを学生により具体的に意識させながら授業を進めていくことも今後の授業への改善点として考えていきたい。

#### 参考文献

- ゾルタン・ドルニエイ著、米山朝二・関昭典訳（2005）『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』大修館書店 60-61.
- 村上加代子・水本有紀（2010）「個別カウンセリングによる自律的学習者育成の試み ―英語授業実践報告（１）―」『神戸山手短期大学紀要』53, 111-122.
- 村上加代子・水本有紀（2011）「個別カウンセリングによる自律的学習者育成の試み ―英語授業実践報告（２）―」『神戸山手短期大学紀要』54, 125-135.
- 大和隆介（2004）「ストラテジーは使いながら身につけさせよう」『英語教育』, 12-13.
- 尹 智鉉（2011）「日本語学習者の第二言語習得と学習ストラテジー」『日本大学文理学部人文科学研究所研究紀要』81, 17-40.
- Bandura, Albert. (1971) *Psychological modeling: conflicting theories*. Chicago: Aldine Atherton.
- Murphey, T. (1998a) Motivating with near peer role models. In B. Visgatis (Ed.) *On JALT'97: Trends and Transitions*. Tokyo: JALT, 205-209.
- Oxford, R. L. (1990) *Language learning strategies: What every teacher should know*. Rowley, MA: Newbury House.